

## ■ 3-1 アジア祭祀芸能の比較研究

### ● 共同研究の活動概要

研究代表者 野村 伸一

2009年度から2013年度の研究活動と成果について、以下の3項目に分けて報告する。

- 1 本プロジェクトの目的、経緯
- 2 方法、現地研究および例会
- 3 意義と成果

#### 1 本プロジェクトの目的、経緯

##### 1. 目的

東アジアの規模で祭祀芸能の比較対照をすることが本研究の目的である。東アジア<sup>かみ</sup>神の範囲は広い。天神地祇、人鬼（死者の靈魂）、祖霊、水中孤魂、あるいは無縁仏、怨霊、悪霊も広い意味では神である。神を招き送る<sup>かみ</sup>営みが祭祀であり、それに伴う一定の身体行為が祭祀芸能である。狭義の祭祀芸能は神の振る舞い（<sup>かみ</sup>神態）だが、神への特定の仕種、神歌、呪語、音楽も祭祀芸能である。祭祀芸能には各地域の人びとの精神世界が凝縮されている。東アジアでは古来、こうした祭祀芸能が多彩に展開されてきた。それは近代国民国家が形成される以前の基層文化に由来するところが多い。

##### 2. 経緯と基軸の設定

###### 1) 経緯

比較対照するためには個々の祭祀芸能を掬い取り、全体のなかに位置付ける基軸が必要である。ところが、現状ではそれがないに等しい。これは東アジアの精神世界を体系的にみようという意向がまだ備わっていないことを意味する。換言すると日本の東アジア認識はまだ地域別、個別、あるいは国民国家の枠に制約されている状況にある。その克服のためには、第一に異なる地域、主題を抱える研究者を集い、基軸を提示する必要がある。研究班はインド、インドネシア、タイ、台湾、中国、韓国、日本を長期にわたって研究してきた研究者10名（野村伸一、鈴木正崇、皆川厚一、吉野晃、丸山宏、廣田律子、星野紘、小川直之、西郷由布子、笹原亮二）で構成された。加えて海外の共同研究者7名を迎えた。すなわち、韓国からは李京燁（国立木浦大<sup>かみ</sup>学校國語國文學科教授・民俗学）、金容儀（国立全南大<sup>かみ</sup>学校人文大学日語日文学科教授・民俗学、日本文学）、田耕旭（高麗大<sup>かみ</sup>学校師範大学國語国文科教授・民俗学）、中国からは余達喜（江西省文聯副主席、民俗学）、陶思炎（東南大<sup>かみ</sup>学校教授・東方文化研究所所長、民俗学）、馬建華（福建省藝術研究院副所長、民間戯曲）、台湾からは謝聰輝（國立臺灣師範大<sup>かみ</sup>學校文學院学文系教授、道教經典）の諸氏である。この研究班では当該地域の特定主題の論文を書くことは目的としていなかった。むしろ、長年、取り組んできた地域を踏まえつつ他地域の祭祀や芸能を実見して意見交換することが期待された。結果的には参加者各自は比較の視点を持って論考をなした（後述「3.2.成果」の項参照）。

## 2) 基軸の設定

一方、基軸に関しては、東アジアのばあい、年末年始の祭祀芸能がまず第一に注目される。中国では秦漢以前の時代から、年末に農神その他を迎えての農耕感謝（蜡）、鬼やらい（儺）、諸神および祖霊の祭祀（臘）がおこなわれてきた。それらは12月の個別の行事としてあったが、のちには互いに複合し、さらに正月の行事とも結びついていく。これにより正月行事が複雑化していった。その間、蜡、儺、臘の複合、分化、肥大化、さらに儺礼から儺の戯への変容などがあった。これは中国だけでなく、朝鮮半島や日本、琉球などでもみられた。

## 2 方法、現地研究および例会

上記のことを踏まえて、本研究班では、できるだけ多様な視点でひとつの年末年始の祭祀芸能をみることにした。初年度（2009年12月）は日本の花祭を調査した。花祭は元来、山伏による臨時の神楽に発して複雑な変遷を遂げて今日に至った。そこには厳しい環境下、一年の生活が保たれたことへの感謝、災厄除け、来訪する鬼による地域の祝福、きたる年の五穀豊穡への祈願、さらには「花」を通して共同体成員の生命の更新を願う祭儀（花育て）が含まれる。当地の祭祀と芸能は儺儀から儺戯への変容として捉えることができる。それはまた中国における年末年始の儺の儀礼の変容（儺戯化）とも通じる。これと関連するものとして3年目（2012年1月）に韓国蝟島<sup>ウイド</sup>の村祭を現地調査した。これは漁村の初春の祭儀である。そこでは諸神、とりわけ龍王と水中の死霊を迎えて一年の無事を感謝し、併せて平安、豊漁を祈願する。同時に模造の船に諸々の災厄を載せて奏楽しつつ海彼に流す。この種の祭祀儀礼・芸能行為は東アジアの各地にみられるもので、その根柢には共通する海洋他界観がある。それを研究者は事例を通して実感した。

ところで、主要な基軸のうちには、もうひとつ重要なもの、すなわち死霊の処遇という問題がある。東アジアの祭祀では遭難死、客死など、所謂、非業の死のあとの処理、祖霊の迎え方、送り方が地域ごとに独特の展開をみせる。これを基軸として設定する必要がある。この基軸は中国では先秦時代からあり、郷儺として儀礼化されていた。それをのちに仏教と道教が取りこみ体系化した。旧暦7月の盂蘭盆会、中元節また水陸会や黄籙齋、臨時の普度（施餓鬼）などがその典型で、これは今日なお各地で盛んにおこなわれる。研究班では時間の制約から、その祭儀現場に臨むことはできなかったが、福建省泉州地域を班として訪問し、死霊祭祀の主題を中心に多角的に調査した（2年目の調査、2010年9月）。泉州、南安、晋江は台湾の漢族文化の故郷でもあり、元来、神仏（わけでも観音、瘟神王爺、廣澤尊王など）の祭祀と奉納芸能が盛んである。とくに泉州の7月の普度は単位となる地域（角頭）を日々、変えつつ1ヶ月も継続するものであった。それは新中国の体制下では迷信行為として禁じられたが、普度に伴う各地域の寺廟での奉納演劇は今も健在である。経済力の増した今日、それはむしろ復活し盛況の感さえある。研究班ではそのことを高甲戯や梨園戯を通して実見し、併せてそれを支える廟文化を調査した。

以上、3年間におこなった全員での現地調査について記した。このほか、班全体の研究会を5回、開催した。すなわち、1. 花祭をめぐる公開研究会（2009年12月12日、神奈川大学）2. 中国泉州地域の祭祀芸能をめぐる研究会（2010年9月10日、泉州）3. 「海の民俗伝承と祭祀儀礼—船による神の来往と身体表現—」公開研究会（2011年12月11日、神奈川大学）4. 東アジア祭祀芸能の比較研究をめぐる研究会（2012年1月26日、韓国光州全南大学）5. 「海を越えての交流—民俗、祭祀、芸能の面から—」の表題下、本機構の別班「アチックフィルム・写真に見るモノ・身体・表象」グループと合同の公開研究会（2012年9月15～16日、神奈川大学）を開催した。以上1～5に加えて、本研究班内の個別班による調査および発表も計4回おこなわれた（別途『国際常民文化研

究叢書』7 掲載「共同研究の活動記録」参照)。

### 3 意義と成果

#### 1. 研究の意義

この研究は東アジア共生を実現するための道標となるであろう。東アジアには多彩な祭祀芸能が存在してきた。にもかかわらず、それを全体的に把握しようとする機運が醸成されていない。これは日本に限らない。要するに、この地域の東アジア認識は「まだ地域別、個別、あるいは国民国家の枠に制約されている」。それどころか、むしろ、「国民国家の枠」は日増しに強固になり、昨今では一国の伝統文化財を「世界遺産」とし、それを国権の争いの道具としかねない趣さえある。こうした状況のなか、本研究班の掲げる祭祀芸能の比較研究は、一見、迂遠にみえるが、実は前近代の統一された文化圏を浮かび上がらせる最も確実な営みとなると確信する。歴史を大局的にみるならば、国民国家の枠はさほど強固なものではない。すでに至るところで、綻びをみせている。中国、朝鮮、日本といった枠組で文化を分断して語ることに無理が生じている。それは克服されて然るべきものである。実際、年末に一年の平安、生業活動を感謝し、神、祖霊とともに饗宴し、併せて新年を予祝すること、あるいは、7月の法事を通して身寄りのない諸霊を思いやり、またそれらの境遇を畏怖すること、これは東アジア基層文化の基軸なのである。そこでは歌舞、叙事的な語りがある。また、そこから発した芝居もある。こうした精神の文化史を「わがこと」とすることができるならば、東アジアの一体性は堅固に築かれるであろう。そこでは中国人、朝鮮・韓国人、日本人などの呼称は符丁でしかなく、余り意味をなさない。実際、本班ではそうした雰囲気を実感した。それはまだ限られた分野のことにすぎないのも事実である。しかし、こうした積み重ねが将来、実現すべき東アジア共同体の礎になるに違いない。本研究の意義はここにある。

#### 2. 成果

本研究班での成果は次のとおりである（以下のうち、2～16は、論究の地域に基づく分類である）。

〔総説〕

1. 野村伸一「総説 東アジア祭祀芸能の比較のために一基軸の設定」

〔アジア〕

2. 星野紘「ユーラシア域の祭祀舞踊——神懸かりと動物模擬——」
3. 田耕旭「東アジア伝統人形劇における口唱歌の普遍性」

〔インドネシア〕

4. 皆川厚一「インドネシア、バリ社会において中国由来とされるいくつかの文化的事例について」

〔タイ〕

5. 吉野晃「タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の儀礼における女性と歌謡」

〔中国、台湾〕

6. 陶思炎「儺文化と江蘇省南部の儺面」
7. 余達喜「中国儺文化と日本の祭祀芸能」
8. 廣田律子「儀礼知識の伝承に関する研究—身体コミュニケーションによる伝承とテキストによる伝承から—」
9. 鈴木正崇「中国福建省の祭祀芸能の古層—「戯神」を中心として—」
10. 謝聰輝「泉州南安奏籙儀礼初探—洪瀨唐家を中心に」

〔韓国〕

11. 李京燁「漁業に関する祭祀芸能にみられる漁撈の儀礼的再現の様相—韓国済州島と黄海道の比較—」
12. 金容儀「韓国の舞童と日本の稚児舞楽の比較研究序論」
13. 李徳雨「韓国西海地域におけるマウル信仰研究—京畿道と忠清南道を中心に—」

〔日本〕

14. 小川直之「「依代」の比較研究」
15. 笹原亮二「民俗芸能と祭祀—中在家の花祭の現場を巡って—」
16. 西郷由布子「身体技法の記録—渋沢「花祭」からモーションキャプチャへ—」

〔調査報告・図録〕

17. 内藤久義「2009年度 中在家花祭次第表」
18. 李京燁・三村宜敬・李徳雨「韓国蝟島の茅船送り」